

古唐津のルーツを探る

第8回

九州電力若手工芸家国内外派遣研修制度
研修報告書



梶原靖元

1 研修概要

(1) 研修期間 平成15年8月20日～11月17日

(2) 研修目的 古唐津のルーツを探る

(3) 研修先 大韓民国

(4) 研修内容

古窯跡視察

現地原料と陶片の採集と写真収録

現代陶窯の視察

博物館見学

現地原料を使っでの制作

2 はじめに～古唐津のルーツを探る～

なぜ、現代の唐津焼は、焼き締め感がなく、もろくて、水が染みて汚くなり、カビが生えたりするのか。古唐津にはそういった欠点はなく、完璧な実用陶器です。何が違うのでしょうか？

ある人に言われて、唐津焼のルーツ李朝陶磁器を勉強しに3回韓国に行き、古窯跡を見て回りました。高麗青磁の窯跡、粉引きの窯跡、井戸茶碗を焼いたと言われる窯跡など。しかし何一つとして古唐津との接点が見つからないままでした。高台の削り方、釉薬の掛け方、目積めの仕方、どれをとっても別物です。

ある時、名護屋城博物館で、文禄・慶長の役北上経路図を見ました。第二軍・加藤清正と行動を共にした鍋島直茂は、右軍として釜山から東萊 蔚山 慶州 忠州 竹山 京城へと北上していました。なるほど、釜山からソウルまでの一直線上と、慶長の役の清州から全州まで、そこから釜山まで、この線上周辺で窯業を営んでいた陶工達を連れて来たのだなと感じました。

韓国の陶芸家に聞いてみると、朝鮮半島の西側は高麗青磁、南は粉青沙器、そして東側は、釜山からソウルまでは、白磁を焼いた窯跡がたくさんあるとのこと。

唐津に連れられて来られた陶工は、白磁を作る技術を持っている陶工だったのではないか。そして唐津でも白磁を作ろうと試みていたけれど白い陶石がないため仕方なく、北波多、相知、松浦、武雄のちょっと色の付いた陶石を使い、出来上がった物が古唐津だったのではないか。後に、広瀬陶石や泉山陶石、天草陶石などの真っ白い陶石が発見されて、初期伊万里、そして古伊万里、そして有田焼と発展して行くのではないか。古唐津は、初期伊万里が出来るまでの過程だったのではないか。

それならもう一度、韓国に行きたい。古唐津との接点がある地に行って、自分の目で確かめたい。そして古唐津の様に堅牢な現代の唐津焼を完成させたいと思い、今回の九州電力若手工芸家国内外派遣研修制度に応募いたしました。

3ヶ月間で、どれだけのことができるのか不安でしたが、90日間、1日1日が大変充実した日を過ごす事ができ、満足しています。

研修のテーマ「古唐津のルーツを探る」と言う大胆な課題は、私一個人には、難しい課題ですが、考え方としては大きく外れることはなかったという自信が持てました。

毎日が新しい発見で、考えを変えなければならない部分も多々ありますが、私は研究者でも、歴史家でもありません。あくまでも陶芸家として見て、感じた事であり、すべてが正しい判断だとは決して言えませんが、その所は「バカなことを言ってい

るな」と見過ごして下さい。私が見て、感じて、思ったこと、経験したこと、考え方の変化を、正直に日記形式で書き留め、研修結果報告としたいと思います。

3 研修結果報告～日記形式で～

(1) 入国，釜山・慶州附近

8月20日（水） 晴れ

釜山に入国

ホテルにチェックインしたあと，旅行社の方に地下鉄の乗り方を習ったが，帰りに1駅乗り過ぎたことに気づかず，ホテルを探すのに4時間もかかる。これから先の旅が思いやられる。

8月21日（木）

釜山博物館を見学。

博物館の資料室で，日本語の上手な柳順女氏と出会い，ここの博物館は佐賀県の名護屋城博物館と交流していることを知る。柳氏には，資料のコピーをさせていただいたり，釜山周辺の窯跡の資料を提供していただいたりお世話になりました。

8月22日（金） 晴れ

昨日に引き続き，釜山博物館見学。

昨日見残した陶磁室を見学し，資料室へと向かう途中，「回路が逆だよ。」と注意される。声をかけて下さった朴氏は，元蔚山女子商業高校の教師で，現在この博物館の講師をされている方であった。以後，農協，郵便局，陶磁器の本屋，スーパーでの買い物，今日と明日泊まるホテルまでお世話になってしまう。

博物館の職員食堂で朴氏と食事をし，陶磁器に詳しいソン氏を紹介してもらう。通訳は昨日お世話になった柳氏。ソン氏は，韓国語のわからない私にははっきりとはわからなかったが，「日本人の窯址荒しが多くて困っている」ということを何度も話中で言っておられたように聞こえた。なんとなくそういう感じがしたが，朴氏も柳氏も一言もそれには触れずに通訳された。ただ何の目的で韓国に来たのかというソン氏の質問に対して，古唐津のルーツをたしかめたい！古唐津は，こうなんだ！という話をしているうちに理解していただけたように思う。

その後は，いろいろな資料をお借りし，職員室の中でコーヒーを頂きながら資料の写しをさせていただいた。

8月23日（土） 晴れ

蔚山へ移動。蔚山倭城址を調査。

釜山ノポ洞からバスで蔚山へ向う。山は低く，唐松，ヒバ，栗の木が多く，土は

黄色，花崗岩の半風化物が目につく。蔚山に入り堅い安山岩に変わる。蔚山広域市鶴城一洞で下車。バスで30km位移動した。

たまたま鶴城一洞の民泊の後ろは加藤清正の倭城址だったので調査した。表面採集で灰釉のタタキ壺の底，アメ釉，粉青沙器，軟質白磁片（高台内部まで総釉掛け）を拾う。最初の調査で幸先がよい。

8月24日（月）

靑良面三亭里窯趾の調査。沙器谷（サギコオル）という言葉を知ろう。

蔚山郡靑良面三亭里三亭は，山，岩，川底の砂，みな松浦道園付近と同じだ。梨園あり，田んぼあり。村のハラボジ（おじいさん）に「粉^{フンチョン}青，白^{ベクチャ}磁の窯址は，どこですか？」と尋ねると「韓国語では，^{ハングンマルロ}沙器谷^{サギコオル}と言うよ。」と教えられた。

窯跡の陶磁器片は，粉青ではなく無文沙器，白飯洞を思わせる白磁があった。化粧がない粉青と思われるものは胎土キメ細かく，上品な作り，焼き締まっており古唐津に近い。白磁はカオリンが多く焼き締まらない胎土で，ロクロしにくいのか分厚い高台だった。

帰りのバスを待つバス停に時刻表がない。三亭里に来た時に，このバス停でバスを待っていたおばさんが，まだ待っていた。いつ来るかわからないバスを待つ。

8月25日（月）

慶州へ移動。良洞民俗村を調査。

慶州市内から遠く離れた小さな村・慶州北道慶州市江東面月城良洞民俗村は，上流層の両班が住み着いた両班村（15世紀～18世紀）で，この村の両班が使用したと思われる白磁，沙器のかけらが大量に散乱していた。

白磁片は，中性焼成で御本があり，総掛け，荒砂高台。沙器は，化粧無し，高台内無釉があった。胎土目跡あり，砂目跡あり。しかし高台の削りが古唐津とは異なり無骨。

川底に陶石がころがっている。川の水はきれいなのだろうか，有田の川のように乳白色をしていた。

帰りはどうやって帰って良いのかわからない。ホテルはもちろん，旅館もなさそうだ。食堂でアジュモニ（おばさん）に「旅館はありますか？」と尋ねると，「ここは民泊」と指を下に差す。少し気持が落ち着きマッコリを一杯注文すると，一升のペットボトル一本を丸ごと大きな鉢にドボドボと注がれてまいった。コップに取り一杯飲むと最高においしかった。チジミと一緒に夜中の二時までかかり飲み干した。

8月26日(火)

良洞村から慶州へ帰る。

良洞村を通るバスは1日に1本、午前7時だけだと言うので、朝6時に起きた。民泊のアジュモニは、もう起きて仕事をしていた。この村のハーブを牛乳パックに土と一緒に入れ私にくれた。香りは良いし、うれしいのだから持ち運びに困った。

「私は7時のバスで慶州に帰ります。」と言うと、「そのバスは、慶州には行かない」と言っているようだったが、聞き取れなかった。私がよくわかっていないのを感じ取ったのか、アジュモニは突然運動靴にはきかえ、指を遠くに差し歩き出す。どうも私をバス停まで案内するようだ。遠いのか近いのかも分からない田舎道をアジュモニの後を付いて歩き出す。65歳前後だろうか？時々立ち止まりひざを押さえているアジュモニ。本当に申し訳ない。

大通りに出る。アジュモニは「良洞村は、桜の咲く頃が美しいから、その頃、家族を連れてまた来い」と言っているようだった。ちょうど、バスがやって来た。アジュモニが運転手に「日本人、^{イルボンサラム}慶州へ行く」と頼んでくれた。ありがとうと手を振って別れた。

良洞に行った時よりも早く慶州駅に着いた。慶州は曇っている。また雨が降ってきそうだ。

8月27日(水) 雨

暗谷洞甕器窯址の調査。

慶尚北道慶州市暗谷洞白磁陶窯址は山の頂上付近だった。下の村で私の代わりに地元のおじさんが、村のおばあさんに窯址の場所を尋ねてくれているが、みんなそんなものはないと言っているようだ。おじさんは、「アボジにまかせろ！」と言って、自分の胸をたたき、山の頂上付近まで連れて行ってくれた。小さい陶片を見つけ、拾っていると、「もっと大きいのがたくさんあるはずだ」と言って、雨の中、林の奥へとズボンの裾を泥で汚しながら走って行く。見知らぬ日本人にどうしてここまで親切にしてくれるのだろうか。ありがたい。

陶片は、三島、白磁、甕器(灰釉タタキ)があった。内側タタキ跡なし、三島の土は荒く石英の粒が残っている。白磁の胎土は、酸化焼成の部分は古唐津・山瀬のようにクリーム色、釉薬も半溶けの所は乳濁の感じ。素文沙器は古唐津のよう、土は精製され、焼き締まり感あり。白磁釉は総掛けと高台無釉と両方あり。目跡は砂高台、4つあり。釉の種類は、灰緑釉、青磁釉、半マット乳白釉。

良洞村の使用破棄された陶片とよく似ている。

8月28日(木)

南莎里甕器窯址の調査。杜仁洞古窯の陶片を見る。

見谷面南莎里甕器窯址を離れ、白磁の窯址を探していると村には、そぐわない今風の建物があり、その庭先の粉青沙器の陶片に気付く。もしかすると陶芸家かなと思ひ玄関をノックすると、同世代の女性が一人、教師だと言う。陶片は、^{イェチョン}醴泉郡^{ヨンムン}龍門面^{トインドン}杜仁洞の物で、寺が火事になった時に譲ってもらったらしい。陶片、窯道具のスケッチをし、写真撮っていると家の中へと勧められる。

この尹汝淑^{ユンニョク}氏は中学校の美術の教師で、ご主人は新羅中学校の美術の教師。子供は3年生の子が1人ということだった。シッケ(米ジュース)とポド(ぶどう)をいただきながら、70%ぐらいしか話の内容はわからないのだが、デザイン帳など、家の中、隅から隅まで見せて頂いた。帰りには、こよりで作った自作のコースターを私の家族の人数分おみやげにいただいて別れた。

慶尚北道醴泉郡杜仁洞陶片

白磁・粉青刷毛目

(釉 薬) 緑味強く、総釉掛けと高台内無釉あり

(胎 土) こげ茶色、珪石や砂が多く残る。水ヒせず、ふるいごしか?

(目 跡) 砂粘土目、4つ目あり、荒砂高台

(窯道具)

尹氏と別れた後、また白磁の窯址を探す。尹氏によると「この村には白磁の窯址はない。甕器の窯址はあるが...。」ということだった。

地図をもう一度確認し、尹氏宅の裏山に入る。白磁片を見つけた。

軟質白磁、硬質白磁、無文沙器、粉青沙器、甕器と多彩。陶土は、相知町の^{けつがん}貫岩と同じ物がある。無文沙器に用いたのだろう。甕器には浜玉町や山瀬の赤土(花崗岩の風化した粘りのある土)に似たものあり。珪石の粒の大きいのが残っている陶石や、キメ細かい陶石もそろっている。

陶石は天草陶石というより、西松浦郡三間坂の石に似ている。

(目 跡) 砂高台、4つ目あり。

(釉 薬) 長石釉：分厚く(軟質白磁)

透明釉：うすく、総釉掛け(硬質白磁)

甕器には、灰釉を掛け、内側にタタキ跡有り。

黒高麗は、黒い土に、緑灰釉掛け。

この窯は技法が多彩だ。粉青沙器 無文沙器 軟質白磁 硬質白磁と移行した窯のようだ。

昼、白磁片を拾っていると携帯電話が鳴った。權^{ミン}氏からだった。今、ソウルで個展をしているので、予定を変更して見に来てほしいとの話だった。翌日慶州を立つことにして、駅に時刻表を見に行くと、席はもう一つしか空いていないとのこと。すぐに切符を購入した。

なお、後日談ながら、この電話のおかげで韓国の南東を襲った台風に遭わずにすむことになる。

(2) ソウル周辺

8月29日(金) 晴れ

セマウル号にてソウルへ移動

10:20 慶州発, 14:54 ソウル着のセマウル号にてソウルへ向かう。セマウル号は全席指定で, グリーン車はなく, 料金は窓側が少し高く, 通路側が安い。私の席は通路側で 29,000 ウォンだった。

窓から山が見える。大邱は砂岩の岩山のような。帰りの古窯址視察が楽しみだ。天安は真砂。水原は山肌が一見有田の黒髪山に似ていたが, 花崗岩だった。

ソウル駅前で権氏が待っていて下さった。今日から1ヶ月間お世話になることになる。よろしく願いいたします。

8月30日(土) 曇り

ソウル国立博物館を見学。

一級品の陶磁器がそろっている。

土器 陶器 高麗青磁・粉青沙器・高麗白磁・黒高麗・甕器 李朝白磁と移り変わっていく様子がよくわかるように展示されていた。

(高麗青磁) 胎土は頁岩の感じがする。釉薬も頁岩釉。

(高麗白磁) 胎土は, 青磁や粉青に用いられている化粧土(カオリン)を原料土として成形したものだろう。釉は胎土と同じ物をうすく施釉。

(甕器) 胎土は泥岩で, 釉薬は, それに少し灰を加えた単純な物と思われる。

(黒高麗) 釉は, 下地釉として甕器の釉薬を掛け, 上釉に青磁, 粉青沙器の釉が使われたものと思う。ただし二度掛けだけでなく, 一度掛けで, 飴釉を用いたものも多くある。

(白磁) 胎土は, 高麗白磁の原料(カオリン)を基礎にし, カオリンまで風化していない花崗岩半風化物の量を増して行って, 軟質白磁から硬質白磁へと変化したものと思われる。

(鉄書) 石間朱(ソクカンジュ), または, 黒高麗の下地顔料。

8月31日(日)

三成里窯跡の調査。

朝10時, 権氏一家と娘さんの彼? 横山さん(東京青山出身の29才, 韓国料理の勉強で滞在)に連れられ, 教会へ行く。11時に終わり教会の裏山, 廣州郡南終面三成里へ, 白磁窯址探し。

初期の窯・民窯

(胎土)硬質白磁

(釉薬)灰青白色，高台内無釉と総掛けあり。

(目跡)胎土目，高台内側から3～4つある。

(窯道具)ハマのみ。

12時，權氏の妻・^{ワイフ}金芝英氏^{キムチヨン}から電話があり，「今，教会で昼食をみなさんとしていたので，窯址からすぐに帰って来るように」とのこと。山を駆け下る。

夕方は，奥さんの唐辛子畑で，唐辛子の摘み方を習い，手伝う。軍手をし，長袖の服を着ないと，後悔するらしい。なるほど，軍手をしても指の爪が痛くなってきた。大変な作業だ。

夜，權氏一家，横山さんと5人で，車で20分ぐらいのところのサウナに行った。地下で湯につかり，大きな水色の服に着がえて2階に上ると，たくさんお客さんがいた。高・中・低と3つの温度の各10畳程のサウナ部屋と冷凍部屋がある。おじちゃんやおばちゃんが隙間なく，寝そべっている。熱い！冷たい！熱い！冷たい！と何度も繰り返す。休憩に温泉玉子とワカメスープを食べた。おいしい！

9月1日(日)

材料を購入。海剛高麗陶磁美術館見学。龍仁の窯跡調査。茶碗2点購入。

京畿道^{イチョン}利川郡利川の原料屋にて白磁の土，1本6,000ウォンを十本購入。現在は，作っていないとのが，陶石の見本を見ることができた。李朝白磁の原料だ。^{チュンチョン}忠清陶石^{コウジュ}驪州陶石，^{テブク}太白陶石，みな白くて軟らかい感じだ。こういうのを使ってみたい。

その後，^{ヘガンコウリョ}海剛高麗陶磁美術館見学した。

京畿道龍仁市龍仁郡二東面西里白磁窯址

窯址の両脇に^{きや}匣の山が出来ていて，その匣のかけらの中に陶片がある。

釉薬は，青磁かというほど分厚く掛かり，高台削り面の所にイボ蛙のようなカイヤギあり。総掛けと高台内無釉とがあり，高台の削りは，古唐津岸岳系の帆柱・皿屋に極似している。しかし，胎土はカオリン分が多く，焼き締まり感弱く，カイヤギ釉。もしかすると，瀬戸唐津の出所は，ここだったのかも？と思われるほどよく似ている。陶片拾いの最中に有田の^{バク}朴氏から電話が入る。「どうしてですか？^{チャン}張氏(朴氏の友人)には，電話をしましたか？」との問いに「まだ一度もしていない。」と私。しかし，後に張(チャン)氏には，大変お世話になることになる。

京畿道龍仁郡内四面大袋里白磁窯址

(釉) 青灰色，総釉掛け，鉄書あり。

(重ね積み)重ね積みで，くっつかないように，高台上に泥粧をひたしぬりして，
荒砂（珪砂）をくっつけてある。おもしろい重ね積みだ。

利川の帰り道，骨董屋に寄る。2点気になる物があり，見せてもらう。白土でやわらかい。カオリン単味だろうか，高麗白磁の流れだと思う。その小茶碗の碗なりは韓国であまり見かけないが，古唐津にはよくある形。高台は，糸切りの跡が残り削りも悪くない。釉掛けは唐津と同じ高台掛けはずし。釉色は，厚く掛っている所は美し過ぎる緑青っぽい，これは白土のためだ。雨漏り堅手か，玉子手になるのだろうか？この手の陶片が出る古窯址に行きたいのだが，今の所まだ行きあたらない。以後の参考資料として購入する。

9月2日（火）雨

移動なし。作業口ク口場清掃。表面採集陶片と原料採集見本の整理。

9月3日（水）曇り

権氏の個展会場，ソウル大学博物館，「純白と節制の美」展見学。

権氏の個展会場でソウル大学の美術学部長とナー助教授に会い食事をし，ソウル大学博物館を見せてもらった。陶磁器は少なかったが民画が見られた。その後，ナー助教授に無理を言って湖林博物館に連れて行ってもらった。

ちょうどここの博物館で，白磁展「純白と節制の美」が始まっていた。展示室に入ると，白磁が純白の光を放っていた。一点の汚れもなく，とろけるような肌。一つ一つがみごとに完璧だ。骨董屋で見る物とこんなにも違うものだろうか，本や図録では，この色，光は表現できないだろう。来て良かった。最高の白磁の世界だ。

湖林美術館を出て，ナー助教授に教わった地下鉄の所まで行く途中，バス停があったので行き先を見るのだがわからない。バスを待っている女子学生にソウル駅行きがあるか訪ねると首をひねりながら見てくれた。その時，「ソウル駅」と書いたバスが来たのでバスに飛び乗ってしまった。女子学生は私がバスに乗ったことに気付かず，まだ行き先を見ている。ごめんなさい，ありがとう。

9月4日（木）曇り

制作。

韓国へ来て初めての制作。龍仁の窯址採集陶石をウスで細かくし、市販の白土と半々でロクロを廻す。作りにくい。日本の土とは、まるっきり違う。特に腰が無い。粘りはあるのに、おかしい！難しい！

9月5日(金) 雨

仁西洞^{インサドン}にて資料探し。

仁西洞は骨董街で有名な所だが、今はもう観光土産物街だ。古本屋に入り、焼き物関係の本を見ていると、これから行く窯址、地図、報告書などが多数あったので、購入した。

購入した資料の朝鮮時代窯址分布現況(白磁中心)を読んでいると、鉄書、黒釉がある窯址は、慶尚南道 慶尚北道 忠清北道 京畿道、忠清南道と、文禄・慶長の役の経路と一致することがわかった。古唐津のルーツと接点があるのだろうか？

9月6日(土) 雨

制作。

広州郡^{イソク}二石里の陶石を砕き、石うすでつき、ふるいにかけて、ホワイトカオリンと、5:5で混ぜ、またうすでつくが、タポタポしている。作りにくそうだ。たぶん、焼き締まらないだろう。

9月7日(日) 雨

広州郡^{タッソン}塔仙洞窯址調査。

民窯の灰色白磁。胎土目積み。目跡5つあり。高台内無釉。分厚い高台削り。

9月8日(月) 晴れ

鶴峰里窯跡調査。

広州^{テリョソ} 大田^{コソリョ} 公州^{ケリョソ} 鶏龍山と移動して、窯跡調査に行った。

忠清南道公州郡^{バンボ}反浦面^{ハクボン}鶴峰里窯跡

刷毛目、檜高麗だけかと思っていたら、白磁があった。山川いたる所に陶石がある。鉄分の少ない純白磁である。

この村の陶工は、慶長の役の時に一人残らず連れ去られたという話があることを権氏より聞く。この地域は毛利・黒田が通過している。うなずけないこともない。

9月9日(火) 大雨

陶芸家訪問。附近の窯跡を調査。

大田から移動して、忠清南道錦山郡秋富面龍池里の陶芸家・李鐘秀^{イチョンスー}氏の陶房を訪問して、交流を深めた。

錦山の麓の山川は、今までの韓国の雰囲気と違い、玄武岩、花崗岩、安山岩が入り乱れている。陶房付近の窯址、白磁、天目釉の小壺あり。

9月10日(水) 晴れ

制作。

秋夕^{チェソク}。ソウル市民は故郷へ大移動で大変混雑するそう。それでどこにも出かかず制作を行った。

二石陶石と市販白磁土を5:5、楊口長石と楊口粘土を5:5で混ぜて、白磁茶碗を作る。また山清^{サンチョン}五部粘土単味で井戸茶碗を作る。粘りがあるカオリンで、とても作りやすかった。

9月11日(木) 曇り 秋夕

道馬里窯跡の調査。

京畿道廣州郡退村面道馬里窯址は15世紀の官窯跡で、青磁、粉青沙器、粗陶、白磁を生産していた。

(白磁) 最高の技術と精製された白土で緻密。釉色は、青白から乳白色。潔白磁である匣器使用。匣器は水ヒかすでひも作り、蓋、鉢ともに内側に白土泥粧を刷毛目。火に強くするため、匣の数は、龍仁につぐ多さ。釉は総掛け、砂高台である。

(粗陶白磁) 白磁の下品土使用。釉色は灰白色。高台付近無釉。匣鉢使わず。胎土目積み4つあり。

9月12日(金) 雨

制作

ハニャン(赤土)で平茶碗を作るが、ひびが入りやすく、失敗ばかり。土の中に鋭利な硅石が混ざっていて、手の平にキズをつくり、ロクロ作業がいやになる。

夜、食事に招待される。骨董品がたくさんある。井戸茶碗もある。昨日調査した道馬里の白磁瓶もあった。さすがに線が美しい。

九月十三日（土） 曇り

茶陶展見学。

仁西洞で茶陶展「韓国の陶芸家20人展」を見たのち、仁川空港へ渡る橋の設計をしたドイツ人のマンションへ夕食に招待される。ここでも骨董や絵画がびっしりと飾られていた。

九月十四日（日） 晴れ

資料を読む。

朝、茶碗の高台削りをしていると「梶原さん、土日は仕事してはダメですよ！」と言われ、部屋で李朝白磁妙選を一日読むことにした。

16世紀末、1592年から98年まで7年間にわたって、豊臣秀吉による大規模な侵略（文禄・慶長の役、韓国では壬辰・丁酉の乱）が行われた。

この戦乱の間に朝鮮陶工が日本へ連行され、陶磁の生産が壊滅に近い状態に追いこまれ、前期に全盛を誇っていた粉青沙器が姿を消し、白磁と粉青の生産が肩を並べていたのが、中期以降は白磁が圧倒的に主流を占めていく。

前期の白磁は、器形や釉薬、胎土、文様など中国の影響が多分に感じられたが、壬申・丁丙の乱以後、多くの点ではっきりした李朝様式を確立する。最も李朝らしい焼き物は、この中期において作りだされる。

前期白磁（15世紀）

粉青沙器は「粉粧灰青沙器」というのが正しい名称で、「白い泥で化粧掛けした灰青色のやきもの」という意味。これに対して白磁は、純白の磁土を使用し、高火度で焼きあげる点で、材料の選択に厳しい条件が要求され、御器（国王の使う器）や中国に対する進献用として特別に制作され、材料の厳しい保護が行われた。

器形が整い、器壁は比較的薄く、その輪郭が描く曲線には、みずみずしい緊張感がただよっていて、胎土や釉色は純白に近く、表面は滑らかで瑩潤という形容が似つかわしく、まさに国王の御器にふさわしい品格をそなえている。ただし、数の上では粗質の白磁がはるかに上廻っている。

中期の白磁 祭器

儒教の様式に用いる祭礼用の器。儀式には、五穀や山海の珍味、酒などを供える祭器を必要とする。

前期においては社会の上層部に限られていたが、中期以降は、精神のよりどこ

るとして一般の庶民にも儒教の儀式に従って祖先の霊をまつことが生活の中心部分を占めてきた。用いる祭器は、すくなくとも九種類、十四個を必要とした。

形の上で面取りの手法が流行、また台皿に「祭」という文字を円圈の中に入れて青花であらわすことも流行しだした。

後期の白磁 分院時代

「分院」というのは、司饗院という官長の出先機関のこと、一七五二年に京畿道広州南終面分院里に設置された。

水滴、筆筒、筆架、筆洗、絵具皿、硯、印章などの文具の制作も行われ、素文、透かし彫り、暘刻、陰刻、彫刻、青花、辰砂、鉄砂など、バラエティに富んだ造形の世界を作りだした。

サンジュ尚州陶工の迷

1413年以降「世宗実録」「地里志」に上品を生産した所として、京畿道広州に1ヶ所、慶尚道尚州に2ヶ所、慶尚道高霊に1ヶ所と記されている。

しかし15世紀の前半、世宗14年(1432年)と、その50年後(1481年)には、尚州の名が挙げられていない。上品を焼いていた尚州の陶工たちが15世紀に後半には、広州の中央官窯に吸収されたのでは？という考えは、私としては、古唐津のルーツでは？などと考えたくなくなってしまうが、朝鮮出兵より百年も前の話で、時代が古すぎるようだ。

一箇所の窯における質的な二重構造

15～17世紀の広州官窯には、同一地区に主窯と従属窯または、中心窯と周辺窯の質的に二重構造をもつ生産組織が存在していた。

主窯では、上質の白磁、従属窯では、粗質の白磁が生産された。従属窯の陶片は、一見して粗質で、サヤも使用されることなく、高台裏の施釉、削りなどもすべて簡便化され、大量生産の条件を備えている。

古唐津は、従属窯と同じ大量生産簡便化の導入なのだろうか。

9月15日(月) 晴れ

広州郡の窯跡3ヶ所を調査。

イソク二石里 トス陶水里 カンウム観音里 クムサ金沙里と自転車で移動。

廣州郡退村面陶水里窯跡

現在この窯址には小・中学校の校舎が立っている。

- (種類) 白磁, 素文
- (釉薬) 灰白色, 高台無釉
- (目 址) 胎土目 4 つ, 高台削り分厚い

廣州郡退村面觀音里窯址

釉薬は灰白色と淡青白色。総釉掛けと高台掛けはずしあり。匣鉢使用は砂高台, トチン使用は胎土目 4 つあり。

粉青沙器には, 印花文あり, 胎土灰青色, 釉は総掛け。素焼片あり。

自然の山川は, 富士町三瀬村の感じだ。

廣州郡南終面金沙里窯址

この窯の陶片は, 小さくともあやしげに青白い炎が燃えているようで, 李朝白磁の白は色ではなく, 光だ。

- (種類) 白磁, 素文, 青華, 匣有り, 砂高台
- (釉 色) 淡青, 雪白色
- (胎 土) 道馬里や分院の陶片よりも純白なのは, カオリンが多く混入されているためなのか? それが中期白磁の特徴か?

9月16日(火) 曇り

分院里(官窯)窯跡調査。

白磁, 素文, 青華白磁, 青華彩。後期官窯である。

9月17日(水) 曇り

釉薬制作。

枯れ草を集めて燃やして水ヒ。楊口長石と泥粧合わせで釉薬を作る。

9月18日(木) 雨

制作。

楊口粘土(官窯時代使用されていた白土)で高台茶碗を作る。

9月19日(金) 晴れ

制作。

昨日作った高台茶碗の高台彫り(生削り)と八ニヤンの赤土で作った平茶碗に粉引き, 刷毛目を施す。化粧土はカオリン単味を乾燥した素地に掛ける。

9月20日(土) 晴れ

楊口^{ヤング}陶土, 窯跡調査

江原道楊口は李朝白磁の中期官窯の主原料の産地。単味ではなく, 慶尚南道のカオリンを調合する。楊口の土は, 白土粘土だということだが, 私は陶石だと思っていた。

広州分院から北漢江を北上して4時間, 38度線の真下, 白石山(1142m)。湖があり, 白い陶石らしき物が見える。それから楊口の村へ入ったとたんに, 浜玉の古窯址, 山瀬の景色に変わる。原料屋は, その山の上にある。そこに小さい溜め池が見える。原土を掘ったあとだと言う白い土が見える。近づいてみると山瀬だった。花崗岩の風化物である。山瀬と違う所は, 雲母がほとんど入っていないということ。最高の白磁, 金沙里の原料は, これだったのか!

江原道楊口郡方山面漆田里窯跡, 長坪里窯跡

(種類) 素文, 白磁, 青華白磁

(窯道具) 匣

どちらの窯の陶片も肉厚作りだが, 広州官窯金沙里窯と同じ原料を使用しているために, 釉胎の色は, 美しい淡青雪白色で金沙里の物と間違いそうだ。

9月21日(日) 晴れ

ボンチョン
樊川里窯跡調査。制作。

今までに作った茶碗を天日干し、素焼きした。温度は830度まで上げる。窯跡へは自転車で移動。

京畿道広州郡中部面下樊川里前期窯址

白磁の上品と下品があった。上品はうす作り、牛乳色、削りていねい、総釉掛け、匣鉢使用。下品は厚手で、釉色灰白、高台内無釉、胎土目4つあり。

9月22日(月) 晴れ

梨花女子大学校博物館訪問。制作。

梨花女子大学博物館まで、高速バスや地下鉄を駆使して来たのに、博物館の入口でおい出されてしまった。何を言っているのか言葉がまったくわからない。ここで引きさがるわけにはいかない。有田の朴氏の友人・張氏に電話をして、電話を通して私のかわりに陶磁器を見たいとお願いしてもらおうと、今は工事中で来年にオープンだそう。それなら仕方がない。

博物館を出て、工事現場をのぞくと陶石が出ていた。純白できめ細かく、泉山陶石のようだが、泉山陶石よりも風化が進んでやわらかく、すぐに粘土になりそう。少しだけ拾ってバッグにつめ込む。

夜は犬肉を食べる。やわらかくておいしい。スープに少しくさみがあるかなと思ったがちょっと辛い味付を入れるととてもおいしくなった。2人前で3人がお腹いっぱい食べられた。43,000ウソ。肉の中では、一番高いそう。

制作は2回目の素焼き。

9月23日(火) 晴れ

窯焚き。

茶碗40個に9月17日に作った草灰釉を掛け、4~5個重ね積み、目積みには、カオリン水ヒかすとCMC(合成糊)を混ぜた土を大豆の大きさにまるめ、少し水を付けて高台の内側から三ツ~五ツくっつけて重ねる。それを窯の中に積み火入れ。

9月は、雨が多く湿気があるためにいつもより時間がかかる。

12:30 火入れ

17:00 還元に入る

20:00 松の小割りを2, 3本ずつ, 2~3分おきに窯に投げ込む
20:40 ユコーン(ゼーゲルではなく, 釉薬)が倒れる
21:10 火を止め終了

9月24日(水) 晴れ

窯出し。

火を止めてから12時間後には, もう窯出し。茶碗の土としては, ^{オフ}五部粘土とハミヤンの赤土に刷毛目が良いでき。白磁の買土は焼き締りが良いが, 釉薬が緑色になり汚い。おもしろくない。失敗だ。

仕上げをする。カオリン目積みはすぐにとれ, 仕上げは楽である。

9月25日(木) 晴れ

民族博物館見学。

9月26日(金) 晴れ

窯積み準備

薪をトラックに乗せ, 京畿道驪州郡金沙里の^{イテホ}李泰昊氏陶房まで運ぶ。釉薬をメッシュに通し, 釉掛け。目跡土を作り, 茶碗高台に4~5つ目積みをつけて, 3~4つ重ねる。そして窯積み。午後八時終了。

明日の窯焚きは15時間くらいかかる予定。

李泰昊氏の目積土の調合 カオリン: 1, アルミナ: 2, 水: 1
" 土灰釉調合 木灰: 8, 楊口長石: 10
" 白磁釉調合 インド長石: 4, 木灰: 4, 石灰: 2

9月27日(土)

晴れ

窯焚き。抹茶碗とマクサバルの違いを教わる。

私は6時に起床したが, みんな7時になっても起きてこない。権氏一家と横山さんが午前9時, 突然巻きずしを作り始める。娘のヨナさんは, 楽しそうにピクニック, ピクニックとはしゃいでいる。

結局10時に全員で登り窯に向かう。窯まで40分, 火入れは12時だろうか。14時間で焼き終えたとしても夜中の2時。大変なことになりそうだと考えていると車がマートで止まる。女性軍2人が買い物へ行き, なかなか戻ってこない。おやつ, ジュース, ラーメン等, 大袋を2つぶらさげて戻って来た。

李泰昊氏の窯に到着後，すぐに火入れ。

11：00 火入れ。

13：00 攻め焚き。

18：00 胴木間終了。二ノ間に移る。

19：00 二ノ間終了。

窯焚き8時間。思ったより早く終わった。

李泰昊氏は，煎茶茶碗，急須を得意とする陶芸家。

自然釉，焼き締めで作った茶碗，小振りの黒楽（半筒）の茶碗があったので，これは抹茶碗か尋ねると「イエス」とのこと。抹茶碗のことを韓国語で「マクサバル」と言うので，「これはマクサバル？」と聞くと，「違う」と言う。私は抹茶碗と「マクサバル」は同じでしょうともう一度聞くと，やはり「違う」と答えが返って来たので混乱した。横山氏に通訳を頼む。

黒・赤楽の半筒型の茶碗は，韓国では，抹茶碗以外にも用いられたりするので，この形は「マクサバル」ではないということらしい。李氏いわく，「コーリャンスタイルマクサバル」は日本でいう夏茶碗（平茶碗），あの朝顔型のことを指すようだ。半筒型は飯茶碗なのだ。

これで権氏が茶碗展には平茶碗しか作らないし，展示もしない理由がわかった。日本も，もともとはそうだったのかもしれない。飯茶碗を抹茶碗と見立てたのは，千利休以後のことだろうか。

コーリャンスタイルは，古来の様式がそのまま受け継がれているのかもしれない。

9月28日（日） **晴れ**
月間報告書作成。

9月29日（月） **晴れ**
窯出し。現地で唐津焼のルーツについて思う。

李泰昊氏の登り窯の窯出し。胴木間は焼き過ぎだと思っていたが火裏の下は半溶け。二ノ間は上が焼けていない。30分程火を止めるのが早かったようだ。ただ短時間で焼き上げたため，灰がかぶらず上々の出来。粘土に灰釉の抹茶碗は最高の出来だと思うが，韓国の人にとって，碗ナリ型は飯茶碗なので見むきもしない。良いものを選び荷造りをする。

残りを割ろうとすると権氏の奥さんが，これでご飯をたべるのでくださいと言うので，そのままここに残すことにした。権氏は一切日常食器は作らない。ほとんど

マクサバルが平茶碗だ。私の碗ナリ型の茶碗は、韓国の人にとっては、抹茶碗ではなく、飯茶碗なのである。

現地で古唐津のルーツについて改めて考えた。高麗青磁から白磁へと、発展、変化する多様な時代に思考錯誤を重ね、白磁への移行を望んでいた陶工集団が、松浦へ連れて来られたのだと考えると、古唐津がまばたきのごとく短命な理由が理解できるように思う。

9月30日(火) 曇り

湖林美術館見学。現代韓日陶藝展見学。作品の発送。

再び湖林美術館に入館し、「朝鮮白磁名品展 純白と節制の美」を見学。その後、2003現代韓日陶藝展を見に行く。

現地で作った作品の日本への発送。

10月1日(水) 雨

分院博物館見学。民俗博物館見学。

京畿道廣州郡廣州分院の分院博物館を見学。この博物館は窯址地に建っている。何日か前にオープンしたばかりで、初めての日本人来館者だと歓迎された。

龍仁郡龍仁民俗博物館を見学。北部・中部・南部地域の民家や陶磁匠の作業場などの復元・展示してある。

10月2日(木) 晴れ

古陶磁器の見学。仁川の土について。報告書送信。

仁西洞の骨董屋で古唐津の金石原古窯出土、天目釉の塩壺とよく似た小壺を発見。店主は鷄龍山窯だと言う。高台の無釉、釉掛け、釉色、高台削り、胎土目址、口作り、胴の張りがよく似ているが、土そのもの、原料が若干違うために、金石原窯のものではないことも分かる。金石原のルーツだろうか？

仁川の土は美しいピンク色。多分カオリンだろうと思う。一部ホワイトカオリンもある。花崗岩の風化物である。

報告書をファックスで送信。

10月3日(金) 晴れ

冠岳山窯跡調査。

冠岳山の登山口はソウル大学の運動場になっていて、窯跡であるが、整備され陶

片は、2、3片しか拾えなかった。

冠岳山の登山入口に白陶石がむき出しになっている。花崗岩半風化物である。大型ユンボで20トントラックに積み、捨てに行っている。純白の陶石がもったいなかった。

10月4日(土)

晴れ

判垈里窯跡調査。

江原道^{ウォンジュ}原州市^{ウォンソン}原城郡^{チジョン}地正面判垈里^{バンデ}は、白磁の窯跡。川底のような瓦礫の道を渡り、村の入口まで来ると、村の男の人5人が集まって来た。その中にカタコトの日本語が話せる人が1人いて、窯跡まで連れて行ってくれた。

ここもやはり山の中腹に窯跡がある。みんなで陶片を拾ってくれる。あっという間に袋一杯になる。日本語を話せる金栄一氏は「この陶磁器は、庶民が使うための物で、日本に持って帰っても、お金にはならないよ。」と何度も言う。「いや、私にとっては価値があります。」と答えると、「大学生か?」と言われたので、「陶工です」と言うが通じない。名刺を見せて、やっと納得してくれる。資料として4、5個だけ袋に入れる。

一人のおじさんが「ちょっと待て」と言って、牛小屋の方から何か持って来る。半焼けの大きな鉢と、小茶碗だ。この窯製品で完品に近い。小茶碗を指差し「飯茶碗?」と聞くと、「いや、昔の飯茶碗はもっともっと大きい。」と教えてくれた。

私の資料としては、この窯には、鉄釉、黒釉のものがあるはずだが、小片もなにも見当たらない。全部が灰白色白磁。高台や腰が分厚く、荒砂高台(珪砂)で重ね積みをし、窯道具は一切見当たらない。高台面取り、高台皿(祭器)がたくさん転がっていた。

この山は、花崗岩のとがった山、風化していない堅い石。

10月5日(日)

晴れ

堤川^{チェチョン}へ移動

堤川駅から東の方向に5kmくらいの所の山が1つ削り取られている。ここも花崗岩半風化物だ。

李朝の人々は、白色を好み、白衣を着て、白磁を追い求めたと陶磁器の本には必ず書いてある。それもあるかもしれないが、私に言わせれば、韓国には白磁を作る原料があちこちにあり、白磁を作る基盤が整っていて、技術さえあれば作れる。無我の白磁なのだ。数百という民窯白磁窯があり、その中から特に純白の原料を選び、精製され出来上がったのが、官窯のあのとろけるような光を放つ純白白磁なのだ

思う。

10月6日(月)

彌勒里窯跡調査。古唐津のルーツについて考察。

忠州郡上^{チュンジュ} 面^{ミルグ}彌勒里窯跡は中期民窯白磁窯で、3基あり、まだ温床、壁、サマ、煙出し、横壁などが残存している。

分厚い作り、ドベ付け荒砂高台、全体に小貫入有り。彌勒里窯跡は、忠州市と堤川市の境界地点にそびえる月岳山(1097m)の中腹にある。そこまで行く途中の車道の両脇には、リンゴ畑があり、今たくさんの実を付けている。九州人の私には、見慣れない風景だ。

ここまでたどり着けたのも、高速バスターミナルの観光案内の女性の「ジャパニーズフレンド」結城新平さん(早稲田大学生で、現在交換留学生としてソウル大学に在学中)の通訳のおかげである。

現地で古唐津のルーツを考えてみた。

加藤清正と共に行動をした鍋島藩の北上経路周辺で見て来た陶磁器の古窯跡は、ごく少数の官窯と大多数の民窯白磁窯址だ。

民窯の白磁陶片と言え、高台付近が分厚く、全体に重く作られており、そこが官窯の製品とは著しく違う所である。官窯は、国の力で朝鮮半島北部の陶石と、南のカオリンを取り寄せ、調合しているのに対して、民窯は村の近辺の原料だけしか使うことが出来ない。だとすると韓国北部の古窯での原料は、花崗岩か、その半風化物のみである。半風化物単味で陶磁器を作るには、腰がなく、耐火度も低いので、どうしても、全体的に分厚く成形することになる。

古唐津もまた、松浦地区の原料(安山岩石の半風化物)を単味で用い、成形、焼成したものと考えられるのでは、ないだろうか?

十月七日(火)

晴れ

忠州から槐山^{クサン}へ移動。

忠州から槐山に行く途中は、石灰岩があちこちとむき出しになっていた。昔、石灰釉を使ったのだろうか。人に尋ねながら、バスを乗り継ぎ80km。華陽^{ハヨソ}溪谷まで来たが沙器^{サキマク}幕里窯跡まで、あと20km。これから先はバスもない、タクシーも来ない。今日のところは民泊に泊まることにしたが、民泊は登山客用の大部屋しかないから貸せないと断られる。ソウルの張氏に携帯電話をかけて、民泊の方に電話を通して頼んでもらう。また張氏に助けていただいた。

十月八日（水）

沙器幕里窯跡調査。

忠清北道槐山郡青天^{チョンチョン}面沙器幕里窯跡に向かう。

早朝、華陽溪谷から青川まで帰ろうとおばさんにバス停の場所と時間を聞くと、夕方5時30分に1本だという。困った。青川まで14,5kmを歩いて帰ることに決心。帰る途中、古びた家が1軒あり、高速バスの時間表が貼ってあった。10時40分発だった。これに乗って青川まで帰る。

青川で、この村に2台しかないタクシーのおじさんと窯址までの値段交渉。1万5千ウォンで手を打って沙器幕里へ移動。

細い道に入る。高麗人参畑とトウガラシ畑の横を走って行く。今までと違う風景、花崗岩地帯から少し離れた感じだ。

道がなくなり民家につき当たる。村のおじさんに窯跡の場所を聞いてもらい、ドライバーのおじさんと歩いて山を登り、トウガラシ畑の中に散らばっている小陶片を拾った。ドライバーのおじさんが見当たらないと思ったら、なんと肥料袋一杯に陶片をつめ込んで帰って来た。陶片のあった場所に案内してもらおうと、高台部分が古唐津そっくりなものがたくさんある。ヤッター！陶片2,3片を選び、資料としていただく。

ただ、この地から陶工が唐津に連れて来られたとは、まだ言えない。なぜなら、陶枕が見当たらないからだ。

十月九日（木） 晴れ

官坪^{カンピョン}里窯跡調査。清州国立博物館見学。

忠清北道槐山郡青天面官坪里2号窯跡

後期の民窯白磁。肉厚分厚く、高台内深く削り込み、荒砂重ね積み。ここの花崗岩は黒雲母入りで、山瀬とまったく同じ花崗岩半風化物だ。投げつけても割れそうにないこの分厚くて重い器も、用の内なのだろうか？

1号窯跡は民家の中で、陶片拾えず。

清州国立博物館展示品

出土地など	特徴、特記事項など
堤川 ^{トコク} 道谷里窯跡	粉青沙器

タンヤンジョント 丹陽甌島里窯跡	
ケシン 清州開新洞出土遺物	高台無釉。
チョンウォンソンデ 清原松垈里出土遺物	高台削りは唐津にそっくり。
ヨンダン 清州龍潭洞出土遺物	砂高台と胎土目跡あり。

十月十日（金）

晴れ

清州クラフトビエンナーレ見学。^{ウムソン}陰城へ移動。

若手はモダンアート。モダン過ぎて実用から少し離れている。人間国宝ランクの作家の物は、用をとらえながらも装飾に走り過ぎている。

陰城へ移動。陰城は、李朝時代白土が掘られた場所で、どんな原料があるのか楽しみだ。

陰城の駅を出ると何も無い。建物は駅だけである。何kmか先に町が見えるので、そちらの方向に歩き出す。清州駅も都市が大きいわりには閑散としていて、待合所にも客は私一人だけだった。

夜食、なぜかメニューのボンシントンが目に付いたのでそれにする。店員さんが、私に興味があるらしく妙に親切だ。理由は簡単で、彼は今日本語の勉強中。そのペソンヨン氏、ビール代をサービスしてくれた。ごちそうさま。

十月十一日（土）

晴れ

^{トウム}冬音里窯跡調査。

陰城バスターミナルから冬音里へ移動。公民館の前で降ろされる。10軒ほどの小さな村。道いっぱいにモミが干してある。さて窯跡はどこだろう、とにかく地面を見ながら歩き出す、村の人が稲刈りをしている。

^{カマチャリオディエヨ}「窯跡はどこですか？」「この道をずっと行って、2つに分かれている右にまだずっと行った所に……」どのくらい行って右にまがるのか、歩いてどのくらいかかるのか私には質問できない。場の雰囲気だけを感じ取り、お礼を言って歩き出す。右に道があり、とりあえず登る。しかし陶磁器が作れるような土・岩ではない。今日は日照りが強く、暑い山道の日陰はヒンヤリとして気持ちが良い。おばさんが畑で仕事をしている。「おばさん古窯址はどこですか？」「ムウオラヨー」前にも何度となく聞いた言葉だ。そんなもの何もないよ、と言っている。おばさんに聞いたのが間違いだった。女性はこういう事には興味が湧かないのか何にも知らない。それに対して男性、特にお年寄り詳しい。先に進む背中の中のバッグが重く肩に食い込む。小川の石はキラキラと雲母が光る黒い石。白磁窯跡なんて無いと言ってる様だ。し

かし今までの経験として、山の中腹まで登ると花崗岩に変わり陶片が落ちているはずだ。田んぼの畦に老人が1人座っていたので「^{カマチャリオディイスマニカ}窯跡はどちらでしょうか？」と尋ねると、「あの道をずっと回って行くとサギコオルがあるよ」と返事が返ってきた。間違いない。ここでも窯址のことを^{サギコオル}沙器谷と言った。8月に蔚山の窯址で教えてもらった言葉だ。すこし道をもどり大きく左に回りながら歩き出す、あいかわらず黒石がキラキラと光っている。山の裏まで歩くと、豆畑から林にかけて白磁片が積み重なっていた。

忠清北道陰城郡陰城面冬音里窯跡

(釉 色) 青白色，鉄書あり，アメ釉あり。

(目積み) 荒硃砂重ね積み

(窯道具) ハマのみ，ハマは傾斜している。

民窯白磁にしては薄作りだ。背の荷物が重いので資料として3，4片拾って来た道を帰る。バスは何時に来るのだろうか？山をくだり村のおばさんに尋ねると「2時」とすぐに答えが返って来た。こういう事はおじさんではダメで女性に限る。バスの行き先調べで頭一杯で、朝から何も食べていない。おなかが減ったが、この村には食堂もお店もない。仕方がなく大きなケヤキの下に腰をおろしバスを待つ。

十月十二日(日)

曇り

忠清北道^{チチョン}鎮川郡^{カフエウオン}広恵院面^{クアム}鳩岩里窯跡調査。

この村も14，5軒の小さな村。おばさんが3人近づいて来た。「沙器谷はどこですか？」と尋ねるが、答えは決まっている。「そんなものは、この村にはないよ。」そのまま北へ歩き出す。

おじさんがいた。^{ベクチャカマチャリオディイソヨ}「白磁窯跡はどこにあるますか？」おじさんは、山の方を指差し、「ずっと真っすぐ登っていくと、ブンチョンサギコオルがあって、陶片がたくさん散らばっているよ。」お礼を言って、山に向かう。道が2つに別れている。とりあえず右の道から攻めてみる。土・石は昨日と同じ白磁が出来そうな感じではない。そのまま歩くと牛小屋が見えて来た。陶片があった。牛小屋の横，山の削り面に青磁の破片が露出している。

私の資料では、白磁古窯ということだったが、青磁窯である。

高台掛けはずし。薄作り。水ヒカすを用いた胎土目積み，目跡4つあり。トッチンあり。無釉のタタキ袋物あり。高台削りは古唐津に似る。土・石は昨日の冬音里と同じだ。

十月十三日(月)

雨

窯跡調査(中止) 唐津焼のルーツについて考える。

報恩郡馬老面赤岩里ボウン マロ チョンアムの窯址に行くつもりだったが、途中どしゃぶりの雨。予定を中断して引き返す。

古唐津は、全羅南道、慶尚南道の粉青沙器がルーツだろうと思われています。私としては、両南道の粉青沙器と古唐津との接点はまったく感じとれず、両北道か忠北道の白磁古窯こそ古唐津のルーツだと考え、白磁古窯跡を中心に旅をしてきた。

しかしここまで見てきて、考え方を改めなければならなくなった。古窯址の後期民窯白磁陶片が、古唐津とはあまりにも接点がないことに戸惑いを感じたからだ。

白磁古陶片よりむしろ、今までまったく無関係と思っていた青磁古窯跡陶片(民窯)に対して近いものを感じ、北道の粉青沙器の古窯址陶片が古唐津に似ていることを確認したからです。

ただし、現時点では窯道具のトチンを見つけることが出来ていません。

十月十四日(火)

曇りのち雨

忠清北道報恩郡馬老面赤岩里粉青沙器窯跡

総釉掛けと高台無釉とがある。目跡は胎土目、高台内と高台外があり。素焼片たくさんあり。トッチン(ズングリムックリしている)あり。火ぶくれの陶片が多く、多分5~6時間という短時間で焼成したものと思われる。釉は長石釉系・土灰釉系の2種類がある。両手にずっしりとくる重量感や、ヘラのあて方が、古唐津古窯の阿房谷や小森谷の雰囲気だ。

窯址は、只今高速道路の建設中。大型ダンプが通り過ぎるのを気にしながら表面採集をする。

古唐津によく似た陶片と窯址は、破壊され、来春には、高速道路の一部となってしまうのだろう。できればすべての陶片を採集したいのだが、ままならない。

十月十五日(水) 晴れ

十月十六日(木) 晴れ

地質博物館見学。

朝鮮半島の鉱物に関してあまりにも無知なので、朝鮮半島全体の土石、鉱物の資料を見学。韓国全体の岩石の種類、場所を理解できた。今まで観察してきた古窯址周辺の石・土と一致しており安心した。

そして、京畿道広州に最高に美しい白磁が生まれたのは、官窯という力もあるが、

その前に最高の白磁の材料が広州周辺には、整っていたということが言える。

十月十七日（金）

曇りのち雨のち晴れ

全羅北道^{キムチエ}金堤市^{クムサン}金山面金山里素文沙器，粉青窯跡調査。

昨日は韓国に来て始めて，日本語が通じる旅館に泊まった。金山までのバス乗り場を教えてもらい，「雨は，降りませんか？」とたずねると「今日は，大丈夫ですよ。」とのこと，とりあえずバスに乗る。

全州の町中を通り抜け田舎道へ入っていくと，小雨が降ってきた。バスは山道へと登って行く。雨は強くなる。窯址行きは無理かな？と思いながら，金山寺で降りる。寒い！下着を二枚重ねで着込み，傘をさし，それでも寒い。今日はお寺見物でしようと思っていると，お兄さんが近付いて来て何やら指を差す。料金表だ。2600ウォンを払い案内板を見ると金山寺は1kmちょっと先だ。確かこの辺にも窯址があったはずだと，地図を広げ確かめる。右手の山の上に2つ，寺より北に1つ。右の山を見ながら足もまた右へと進む。畑と民家が5，6軒あった。

梨園の中に陶片を見つける。三島，無文沙器，青磁，白磁。総釉掛けと高台無釉。胎土目4つ，荒砂重ね積みもある。砂目積み目跡8つのものもある。無釉タタキ壺もある。

ここの窯址は，なんでも揃っている。相当長い間，創業していたのだろう。

唐辛子畑で唐辛子摘みをしているおばさんを通り過ぎ，おじさんに「窯跡？」と尋ねる。この道を数km登るとあると言う。雨はいつも間にかやんでいる。金山も，山，溪流，赤松，花崗岩に真砂土と，浜玉町山瀬の古窯址に登っている感じだ。小さな陶片が落ちている。もう少し登ると窯壁があった。ズングリムックリの陶枕，胎土目の目が散乱している。高台無釉，粉青沙器と素文沙器。雰囲気は，古唐津に似ているが…。

山を下ると，下の村でおばさんがまだ唐辛子を摘んでいた。「磁器^{チャギイッソヨ}あった？」と聞かれ「はい，ありがとうございます。」と答えて帰った。

十月十八日（土）

曇りのち雨のち晴れ

全羅北道^{チョンド}金堤市^{トンゴク}金山面清道里東谷窯跡調査。

金山コースホテルから窯址まで往復12～3km。バスもタクシーもないので歩きだ。朝食用のパンを買い込み歩き出す。

清道里の入口にある大きな堤まで来た。中間地点だ。昨日の陶片が背中中のバッグに入ったままなので重い。道の脇に陶石が転がっている。白くてやわらかい色，風化が大分進んでいる。この先にある窯址が楽しみだ。山を二つ大きく左に廻り切っ

た所に窯跡はあった。

(種類) 素文白磁のみ

(釉掛け) 高台掛けはずし

(目 址) 砂目積み，4～8つ

(窯道具) ハマのみ

ピンク色の陶片は酸化焼成だろう。高台の削りや，高台脇にカイラギ。温度は，だいぶ低い。胎土は焼き締まっている。小さい破片だが重量感がある。もう少し大きい陶片はないだろうかと探す。

急にあたりが暗くなって，大粒の雨が降って来た。雷まで鳴り出した。村の人々も慌てて道端に干してあった布にビニールシートを被せ始めた。

雷は大嫌いだし，早く引き上げよう。近くの民泊までもどって出直した。来た道を堤の所まで戻り，一軒だけの雑貨店で近くに民泊か旅館はないかと聞くと，金山寺まで行かないとないそうだ。昨日泊まった所だ。そんなに歩きたくない。取りあえずこの店で辛カップラーメンを買い，お湯を頂き昼食をとる。

空が明けて雨がやんだ。窯址へ戻る。さっきの窯の奥にもう一つ窯址がある。今日の本命は，そっちの方だ。三つ目の山を左へ廻ると谷間に大きな陶片が転がっている。私の資料とは少し違う。

(種類) 粉青沙器，素文沙器，白磁。

(釉掛け) 高台掛けはずし，総掛け。

(目 址) 砂目積み，5～8つ，荒砂積み。

前の窯に戻る。道の脇には小さな陶片しかない。山には，うっそうと草が生えている。パーカーを被り，草叢にもぐり込むと，窯壁がゴロゴロと積み重なっている。その中に大きい陶片だ。素文沙器と白磁である。さっきの高麗茶碗風の破片は，白磁素文沙器の生焼けだろうか？土味は伊万里の市ノ瀬高麗古窯陶片によく似ているが…。

十月十九日(日)

全州国立博物館見学。

十月二十日(月)

曇り

釜山へ移動。

全州からイムシル12号線，イムシルから南原^{ナムウォン}にかけて，バスの中からだが，肌色カオリンの山があるのが見えた。岩も白くやわらかく光る。イネ刈りは，終わり

をむかえている。途中中里氏からの電話が鳴る。11月22日から大邱^{テグ}にいらっしゃるとのことだが、残念ながら、その時は私は帰国している。

バスは国道35号線に入る。山清^{サンチョン}まではカオリンの色、純白に変わる。生草面である。初めて見るカオリンの大地である。バスを降りたいが、高速道路なのがくやしい。

午後7時半に釜山に着くはずのバスが、午後8時、高速を降りる時に渋滞にかかる。チャガルチ市場で権氏と会えたのは夜9時。一緒に食事をして、宿泊地に車で行く。部隊^{フテ}の中だそう。山の中腹あたりは真っ暗。部隊の正面入口に車がつくと、どこかで何やら言っている。声とは反対の方向の兵隊が、ゆっくり2歩下がりながら自動小銃を私たちに向ける。何が起きているのかわからない。銃口が正確に私に向けられた。権氏は両手を上げている。奥さんが通行許可書を提示すると、自動小銃が私からはずされ門の中へと進められる。一時はどうなることかと思った。

十月二十一日(火)

晴れ

釜山日報ギャラリーで権氏の個展を見学。

権氏の個展を見学、茶碗展である。

権氏と友達で骨董屋の山村^{サンチョン}氏と夕食をとる。途中、お客さんが来られたと連絡が入り、権氏はギャラリーに戻られた。残されたのは、日本語のわからない山村氏と韓国語のわからない私の2人きり。私は古窯跡の資料を開き、山村氏に見せる。すると、ここの窯は何世紀の窯で魚の絵があるとか、雨漏り堅手はこの固城窯地から50%、残りは半島全体のどこか不明とか、高麗茶碗の中で何が一番好きかとか、食事をするのも忘れる楽しいひと時だった。

言葉はお互いわからないのに、共通するものがあると何とか対話出来るものだ。

十月二十二日(水)

釜山市美術館見学

十月二十三日(木)

晴れ

「マクサバル」の意味について教わる。

ギャラリーのスタッフ・丁天求氏はアジア仏教の本を書いた人。マクサバル(抹茶碗)の「マク」の意味を教えてもらう。

私は、マクとは抹茶碗の「抹」の意味だと思っていたが、「抹」の意味はまったく違っていた。制約しない、大衆の、雑多な、精選しないという意味で、マッコリの“マッ”と同じだそう。

十月二十四日（金）

晴れ

マクサバルの本来の姿

午後5時、権氏の個展会場を片付けた後、スタッフの皆さんと食事。そして茶房へ行った。茶房のオーナーから粉青沙器、^{ファン}扶安粉引茶碗、井戸茶碗を見せていただく。

私はマクサバルを本来の姿で使ってみたいと希望し、食堂に連れて行ってもらう。出て来た物は、アンモニア臭の強いエイの切り身（ホニイの刺し身）と濃酒（^{トンドンシュ}マッコリとちょっと違う）。まず大きなひょうたん型のおたまで、濃酒を井戸茶碗に2杯入れ、それを喉を鳴らし一気に飲み干す。すると他の人がトウガラシと大粒のゴマをつけてエイの切り身を私の口に入れてくれる。次にその井戸茶碗を隣の人に渡し、濃酒を注いであげ、飲み終わるとエイの切り身を口に入れてあげる。とても不作法な使い方をする器が、^{マクサバル}井戸茶碗の本来の形である。

想像もしないことであったが、これがマクサバルの本来の姿である。大変興味深い体験が出来た。無理な願いを聞いてくれた茶房のオーナー、大変有り難うございました。感謝します。

十月二十五日（土）

晴れ

^{サチョン}泗川古窯址調査。^{コソン}固城古窯址調査。

早朝、権氏と山崎氏と趙氏（日報ギャラリーのスタッフ、剣道の指導者でもある）に車の運転をお願いし、泗川古窯址と固城古窯址を案内してもらう。全走行距離35.5 km。

^{サチョン}泗川古窯址（慶尚南道泗川郡^{コンミョ}昆明^{ソンボ}面城方里）

金永泰氏の陶房に行く。城方里周辺は安山岩である。金永泰氏の案内で近くの甕器窯址に行く。窯址周辺は泥岩に変わる。

陶片は、内側にタタキ文あり。釉は、灰釉ではなく甕釉。

^{ウンサ}隠土里白磁窯址

この周辺は、ピンク、ホワイトカオリンがポコッポコッと顔を見せている。昆明は官窯時代使用された、^{スウルト}昆明水乙土が出る場所。

（釉 薬）青色釉。

（釉掛け）総釉掛け。

（窯道具）ハマのみ。円柱形、白土使用。

このほかに青磁の窯址あり。生地はカオリン単味。この地域は薩摩焼のルーツと言われている場所であり、十分納得できる。

ヨソン
固城古窯跡（慶尚南道固城郡九萬面芋蓮里）

ここは、泗川より南東30kmにある。大量の白いカオリンが山積みされている。私は玉子手茶碗か、雨漏り茶碗を期待して来たが、現実には白磁窯址である。重ね積みの一番下の茶碗のみが温度低く、酸化焼成され、玉子手や雨漏り茶碗になるのではないかと考えられる。

十月二十六日（日）

晴れ

山村氏の店で高麗茶碗を見る。慶州へ移動。

釜山を立ち、テグ^{テグ}に向かう。先日釜山でお会いした骨董屋の山村^{サンチョン}氏の店で高麗茶碗を見せていただく。山村氏はまだ若い人だが、見る目があり、いい茶碗ばかりが揃っている。

その中でも特にめずらしい雨漏り茶碗を原価で譲っていただいた。釉色良し、見込み広く、景色もあり、私の茶碗制作において、最高の参考資料になると考える。

今まで見て来た古窯址周辺の岩石と、ここで手に取って見ることの出来る高麗茶碗を見て、蕎麦茶碗、井戸茶碗の土は、古唐津窯跡周辺の安山岩にカオリンを何割か加え、ふるい漉しか、簡単な水ヒで良いように思われ、粉青沙器（堅手）に関しては、単味で用い、丁寧な水ヒが必要と思われる。

官窯白磁については、サト^{サト}とカオリンを用い、完璧な水ヒと精製の上、酸化焼成したものが雨漏りや玉子手であり、民窯白磁は沙土単味に近いと思う。黄磁はカオリン単味のように思われる。

権夫妻と山村氏が突然慶州に行くことを決める。私も誘われる。慶州市の面長（町長）がぜひ会いたいとのことだ。また逆戻りである。今度は、山村氏の運転。高速道路を1時間30分。夜8時に面長の自宅着。面長夫妻と水墨画家（現在韓国で一番らしい）パク^{パク}大成氏と慶州市副市長の黄鎮浜夫妻が迎えてくれた。今夜は、ここに泊まる。

十月二十七日（月）

慶州

面長（町長）の家に泊まり、朝起きると霜が下りていた。寒いはずである。朝食を簡単に済ませ、画家のアトリエに行く。ナム^{ナム}山の麓、大きな松林の中、古い伝統的

な韓屋を修理の途中だ。瓦や漆喰も昔の物で、伝統の手法で復元されている。それから役所の面長室に行き、観光案内をしていただく。

この地域は、高麗時代、倭寇に何度となく被害を受けた地域である。高麗王の墓が海の中にあって、それは倭寇の侵略を防ぐためだそう。その東海^{トシヘ}の海辺で昼食、昨晩会った慶州市副市長も駆け付けてくれて、海鮮料理をいただいた。

夕方全員そろって、今度は、また大邱の山村氏の骨董屋へ。夕食を済ませ、ここで皆さんと別れて私は旅館へ。面長夫妻は慶州へ、権氏夫妻はソウル広州へと帰られました。大変お世話になりました。

十月二十八日（火） 晴れ

大邱。体調不良のため休む。

十月二十九日（水） 晴れ

慶尚北道高靈郡高靈邑快賓里粉青沙器窯跡調査。

高靈は安山岩地帯。期待しながら往復10km歩くが窯跡が見つからない。窯跡は、アパート建設地で、山半分が削り取られていて、粉青沙器数片と伽耶土器が少しあった。ただ粉青沙器の目跡が高台の外側にあり、胎土目4つあり。総釉掛け。

伽耶土器の破片採集地は泥岩であった。土器ぐらいいは粘土だと思っていたが...

十月三十日（木） 晴れ

慶尚北道高靈郡星山面沙堯洞窯跡調査。

慶尚北道高靈郡星山面箕山洞窯跡調査。

（種類）粉青沙器（三島）

（釉掛け）総掛け

（目積み）胎土目、砂目積み

（窯道具）ズングリ陶枕と鉢サヤ、貝あわせか？

高靈から星州^{ソンジュ}へと伽耶山の麓を北へ走る。バスの中から見る景色は、韓国を旅して来た中で、最も私が好きな風景である。浅くして広い川。西に伽耶山。広がりを感じさせる平野。ところどころに小さな韓屋。ほっとさせてくれるのは、多分安山岩地帯だからだろう。陶芸家としては、山清^{サンチョン}のカオリンの大地は魅力的だが、慣れないせいか、あの白さには違和感があり、花崗岩地帯には、山は美しいが堅く尖った冷たさを感じる。

十月三十一日（金）

晴れ

慶尚北道^{サンジュ}尚州郡^{フアドン}化東面^{オサン}於山里粉青沙器（三島）窯跡調査。

- （目 跡）胎土目内側に3つ
- （釉 ）厚く掛けられた青磁釉
- （胎 土）キメ細かく精製されている
- （窯道具）ズングリ陶枕と成形損じ重ね台

^{ナクソ}洛西でバスを降り、於山里へと。花崗岩。河川を西へ5 km、ゆるやかな坂を登ると、安山岩、礫岩へと変わり、そこに粉青沙器窯跡があった。

この窯跡は盗掘されていて、窯の上方にある墓も掘り返されていた。すぐにこの場を離れる。

十一月一日（土）

晴れ

慶尚北道^{ネソ}尚州郡^{ブクチャン}内西面北長里窯跡調査。

慶尚北道尚州郡内西面^{ピョンチ}平地里窯跡調査。

陶片は、散乱しているが、窯壁見つからず。

粉青沙器（三島） 総釉掛け。目跡，砂目積み。

素文沙器 高台内無釉。目跡，胎土目。

軟質白磁片あり。

村の人々に窯址の場所を尋ねるが、誰も知らないと答えるだけ。雨漏り手の小さな破片だけを拾い、謎の尚州窯は、謎のまま終わる。期待しただけに歩き疲れた。

十一月二日（日）

晴れ

^{ムンギョン}聞慶へ移動。人間国宝・キム氏の陶房を訪問。

聞慶は、紅葉真っ盛りの季節だった。

韓国で一番会いたかったキム氏の陶房に行きたいが、住所がわからない。山の景色につれられてブラブラと歩き、警察署で尋ねてみた。「キムジョンオク氏の陶房は、どこにあるますか？」「日本人か？」「ええ」

ちょっと待てと言われて、コーヒーをいただきながら待っていると、パトカーに乗れと指図をされ、送ってもらった。キムジョンオク氏の陶房は、峠を下った所にあった。「日本人。韓国語はまったくしゃべれない。先生に会いたいと言っている。」

と警察の方が説明してくれている。陶房の入口に「人間国宝」と石碑が建っている。

どうしよう。窯場で窯積みをしている弟子と、女性が六人、奥にキム氏が仕事をしている。とりあえず、あいさつだけでも…。

「日本人ですか？どうぞどうぞこちらへ。」キム氏は、ていねいな日本語で家の中へ通して下さり、お茶を入れて下さった。私の話を聞いて「あなたの行きたい陶房は、ここから15km北の方。今はもう亡くなった父と兄の陶房で、そこは今、文化財に指定されています。どうしてもと言うなら、甥がその近くで焼き物を作っていますから、電話をしておきます。そこまでは、バスがないのでタクシーでいいですか？」と言われた。

連絡をしていただき、一旦警察署までパトカーでもどり、タクシーを呼んでもらう。警察官にお礼を言って、観音里へ行った。迎えてくれたのは、私と同世代のキムヨンシク氏。こちらは日本語はまったくだ。ロク口引きの途中である。何個か作り終わるまで見学をして、展示場でお茶をいただく。そして、キム氏の息子(4才?)とトラックに乗り、あこがれの陶房へ連れていってもらう。

登り窯、原料精製場、ロク口場、白磁原土場(沙土)。思ったとおりである。昔の技術が受け継がれ、そのままここに残っている。ここに来て、すべてがわかったような気がする。六代目キム氏のハラボジの墓に手を合わせ、ここを発つ。

帰りは、聞慶バスターミナルまで送ってもらい、高速バスで安東^{アンドン}へと向かう。皆さん本当にありがとうございます。

十一月三日(月)

曇りのち晴れ

^{ハフエ}河回村見学。柳時柱氏と交流。

安東から河回村へ移動。今日は窯跡ではなく、300年の時の流れが残っている村の見学。私の想像では、この村で使用破棄された陶片が散らばっているはずだ。それを見ると、この周辺の古窯の種類が大体想像できるのではないかと思う。

河回村は入場料を取られる。1600ウソ。悲しいことに、今はもう観光地になっている。ふらりと細い道を入り、村のはずれの家につき当たった。見覚えのある韓屋があった。私が憧れて、陶房のモデルにした、本でしか見たことのない柳時柱^{リュンジュ}氏の家だった。住宅としては最小限の建物。私は、この韓屋の写真を見せて、大工さんに陶房を建ててもらったのである。喜ぶべきか悲しむべきか、今は民泊になっている。とりあえずゆっくり見学したいので、今日はここに泊まることにする。

ここの主人・柳時柱氏は漢字が達人な人で、漢字を使って話をするのができた。「ここは風が強いですね。」と言うと、「西風 秋冬。南風 夏、季節風」とのこと、「大風は?」「大風春、無方向」だそう。最も端的で的を射た表現である。

私は、今までこういうことに鈍感であったが、今ははっきりと示されて理解できた。これは、古窯址を探すのに関連がある。古唐津古窯もそうだが、韓国の古窯跡も大方、東北に向かって登っている。それを頭に入れて山で窯址を探すと見つけやすい。昔の人の知識はすごい。感心させられる。

十一月四日（火）

晴れ

河回村

この時期は大豆の収穫時期で、中庭にたくさん大豆のさやが干してあった。主人が棒で叩いて豆を落とし、その大豆をアジュンマ（おばさん）が一個一個選別している。私も手伝う。虫喰いや黒くなった豆を取り除く作業だ。山積みされた選別前の大豆。大変な仕事である。私は1時間ほどでやめたが、柳氏は夜の10時過ぎまでやっている。朝も七時には選別を始めている。すべて手作業である。

権氏の奥さんが、自分で唐辛子を作り、美しい色のキムチを作るのと同じで、安東の豆腐^{トフ}がとても美味しい理由は、この手作業にあると思う。この手作業の仕事が、現代は行われなくなった。陶芸家もそうだ。原料選別をする者は皆無である。すべて原料屋任せ、一番重要な部分なのに。現代の陶磁器の欠点は、ここにあるのではないかと強く感じる。

河回村で使用破棄された陶片

硬質白磁	総釉掛け、荒砂高台
軟質白磁	
素文沙器	高台無釉、胎土目4～5つあり

安東から青松^{チョンソン}まで、えび茶色の土と岩石の山肌。美しいとは言えない。その間に白いカオリンになる一歩手前の土石がはさまっている。

十一月五日（水）

曇りのち晴れ

慶尚北道青松郡府東面^{フドン ナドン}羅洞白磁窯跡調査。

府南^{フナム}から羅洞行きのバスは2時間待ち。バスに乗り羅洞へ向かう。府南の川は陶石の河原だ。川ぞいから真っすぐに立つ岩山に生えた松の緑とクヌギの枯れ葉、真っ黄色のモミの木？ 聞慶の赤い紅葉とは、また違った彩りである。羅洞は思ったより遠い。帰りのことが心配になってきた。

バスの運転手がここで降りると指図をする。降りてバス停を見ると、“ナドン”ではなく“ネリ”と書いてある。村の人に確認すると、ナドンだと教えてくれる。窯

跡の場所を聞くと「知らない」と言う。そして「窯跡なら、ここから10km先のイチョンに行きなさい」と教えられるが、イチョンは後期白磁窯跡である。初期から中期の窯址でないと意味がない。仕方なく村に落ちている小片を拾って次の窯跡、^{ネヨン}内龍洞に行くが、ここも誰に聞いても「知らない」。村の人々が知らなければ探しようがないので帰ることにした。

バスの時間をたずねると、16時だと言う。あと4時間ある。韓国の山深い村の窯跡を訪ね歩いて2ヶ月半、もうこれにも慣れてきた。

青松ほど大量の陶石がある場所は知らない。山全部が陶石だと言っても間違いないだろう。ここの陶石はカオリン分が多いせいかな、チョークのような感じだ。陶片も軟質白磁で不透光性磁器である。

十一月六日(木) 晴れ

慶尚北道安東郡^{イルチク}一直面^{ピョンバル}坪八洞白磁窯跡調査。

カオリン分の多い安山岩と砂岩、窯址は20年程前にくずされ、唐辛子畑と田んぼに変わっている。唐辛子畑を行ったり来たり何往復もして、陶片2cm四方のみ。軟質白磁で、驪州で買った小茶碗と同じ物。やわらかく白い胎土に、美しい緑釉が掛かっている。鉄絵あり、本当に残念だ。

十一月七日(金) 晴れ

義城郡玉山面^{ウイソン}立岩^{オクサン}洞窯跡調査。義城郡北安面^{ピアン}安坪洞^{アンピョン}窯跡調査。

立岩の窯跡は全く見つからない。村の老人が^{イルボンサラム}日本人だと言って、14、5人集まってきたが、みんな、窯跡はないと言う。帰りのバスの時間を聞くと12時。今は11時。せっかくここまで来て、何もしないで帰るのはいやだから、バスの時間まで村に1つしかない床屋さんで、長く伸びた髪を切ってもらう。5000ウォン(五百円)であった。時間になってもバスが来ない。1時35分、やっとバスが来て義城に帰る。

次の窯跡の安坪洞行きのバスをバスチケット売り場のアガシ(お姉さん)に聞くと、そこ行きのバスはないと言う。朝もそうだった。一番くわしいのは、タクシードライバー、停留所の場所とバスナンバーを教えてくれる。

安坪洞に着き、村のおじさんに窯址の場所をたずねるが、「ない!」「知らない!」一辺倒だ。自分で探すしかない。安坪洞一里から二里と地面を見ながら歩く。安山岩と砂岩。砂岩は、岸岳城のものより粒子は大きいけど、そのすき間にカオリンがたくさん含まれている。良い陶片がありそうな雰囲気なのだがと思いながら歩いていると、1、2片だけ淡く黄色い玉子手色の陶片があった。それを拾っていると、上

の方から人の声がした。「何をしている！」「あの～^{トジャキカマチャリイッスムニカ}陶磁器窯址ありますか？」と言うと「窯址なら、この道をずっと行って右に回り、山を登って行くといっぱいあるよ。青磁窯だ。川向こうの山には白磁窯址があり、甕器窯もあるよ。」と教えてくれた。

とりあえず近くの窯に行ってみる。山の麓に陶片1, 2片。山に登ると、小さいのが1片、もっと上に1, 2片だけ。山の中腹に小片が1片。陶片がなかったら上には登らないのだが、1, 2片は落ちている。山の頂上まで登ったが窯壁はない。日が暮れてきたので山を下る。下ってしまい半分あきらめながら唐辛子畑をのぞいてみると大きい陶片と窯壁があった。

(種類) 三島, 刷毛目, 素文沙器, 小鉢, 白磁

(釉掛け) 総釉掛けと高台掛けはずし

(目 址) 胎土目と砂目積み3～4つ豊付き上にある。

ここの窯の陶片は一個一個変化があり、味があるが、玉子手はなかった。川の向こうの村にはあるのかもしれない。

日が暮れて暗くなってしまったのでバス停まで急ぐ。

十一月八日(土)

曇りのち雨

サドゥン^{サドゥン}沙等里窯跡調査。

大邱から^{キムチョン}金泉に移動し、窯跡に行くため市バスに乗った。市バスの中では、8人のアジュンマ(おばさん)達が私の行く先で言い合いが始まってしまった。私が行く“キョリ”というバス停がないからだ。^{イルボンサラム}「日本人か? ^{ハングンサラム}韓国人か?」とみんなが指を差して言う。外はどしゃぶりの雨で何も見えない。

冗談だと思うが「韓国語がしゃべれないなら市内バスには乗るな」と言われてしまった。私もそう実感した。15km程走ったのだろうか、アジュンマが「ここで降りなさい」と言う。お礼を言って降りる。バス停には、“チネ”と書いてある。村の雑貨店が停留所だ。店の中に入りアジョシ(お兄さん)に「ここはキョリ?」と聞いてみると「イエス」と答えが返って来て一安心した。

ここから沙等里行きのバスに乗り換えなければならない。1時55分だと言う。すぐにバスが来た。アジョシ(おじさん)が、運転手に沙等里まで行くか聞いてくれたが、行かないそう。次は2時35分。今度は、私一人、バスが来た。何度も「サドゥンリイムニカ?」とたずねてみるが全く通じない。後ろから乗ってきたアジュンマ(おばさん)が乗りなさいと誘う。

バスは満員だ。またアジュンマ達に「どこから来た?」「どこに行く?」「何をし

に？」とはやしたてられる。「朝鮮時代^{チョッソンツデー}、陶磁器窯址^{トジャキカマチャリ}、調査^{チョーサ}」という説明だけは通じたが、日常会話は全くわからない。アジュンマの一人が私と同じ所で降りるらしい。このアジュンマと一緒に降りなさい、そして道を教えてもらうようにと言っている。運転手は「アイゴー、アイゴー」とため息をついて、私の行く先を心配してくれている。

次のバス停で、アジュンマについて降りる。バス停には、“サドゥンリ”と書いてあるが、ここの村は（聞き取れない）だそうだ。アジュンマは買い出しの帰りなのだろう。荷物を両手にぶらさげている。一つ持ってあげるが重たい。急な坂を登って行く。「私の家はここだから。サドゥンリは、ここをずっと登って3 km先だ。」と言う。仕方がなく、傘を差して坂を登る。

山の頂上まで来た。景色がいい所だ。この辺は花崗岩。安東周辺の安山岩地帯からまた花崗岩地帯に戻って来てしまった。多分この窯址は白磁を焼いた窯だろう。

ここからは下り坂。下りということは、帰りは、登らないといけない。遠くに1つの村が見える。あそこまで行くのか…。この辺に窯址があったら良いのだが、山の方向的には、ここら辺で良さそうだがと、谷間を覗いて見る。

窯壁があった。窯壁に白土がぬり込められている。間違いなく白磁窯跡だ。谷を登る。陶片はない。もっと登るが見つからない。登るだけが能ではないと、昨日の経験を生かして、今度は川の方に谷を下っていく。すると唐辛子畑の中にあった。

慶尚北道金泉郡釜頂面沙等里中期民窯白磁^{フファン}

(種類) 素文沙器，刷毛目，軟質白磁

(目 址) 砂高台

軟質白磁は山瀬古陶のよう。独特の雰囲気。素文沙器から軟質白磁，そして硬質白磁と移行する時期の窯。

十一月九日(日)

曇りのち雨

移動(金泉^{コチャン} 居昌^{ソビョン} 西邊里^{チンジュ} 居昌^{チンジュ} 晋州)

金泉から館基^{カンギ}は真砂土。館基からは、真砂土の色は白くなる。川の土手は、すべて崩れている。この間の台風の影響だろう。今、下の村の方から修復されつつある。

居昌バスターミナルに着く。西邊里窯址は町はずれの村。この村には山はない。窯址わからず、すぐに引き返し、次の窯跡、南原任実^{ナムウォンイムシル}に行きたいが、夕方までバスがない。明日晋州で中里氏と会う約束をしているので行くと間に合わない。仕方なく、あきらめる。

十一月十日（月）

雨

晋州城内の陶片採集。中里氏と会う。山清の陶芸家・閔泳麒氏と交流。

晋州城内に博物館があるのだが今日は休み。

ここは壬申倭乱（文禄の役）の時，民間軍7万余名が殉節した場所で，当時使用された陶磁器片が散らばっている。9割は口作りの分厚い軟質白磁。残り1割が，三島と素文沙器。晋州城址自体は安山岩であるから，カオリンの多い軟質白磁は山清や泗川産だと思う。

18時，中里氏ら4名と会い，閔泳麒氏の陶房がある山清へ向かい，奥さんの手料理をいただき，陶房で作品とここの窯跡・陶片を見せていただく。夜遅くだったので，窯跡は見られず残念だった。

慶尚南道山清郡丹城面放牧里窯跡

（種類）軟質白磁，碗ナリ有り

（目積み）砂目積めたくさん。畳付き上

十一月十一日（火）

雨のち曇り

慶南発展研究院歴史文化センター見学。五部粘土の原土場見学。

昌原市馬山の慶南発展研究院歴史文化センターにて，発掘調査陶片を見せていただく。

鎮海市熊東面頭洞里熊川窯跡陶片

井戸茶碗の窯跡であるが，井戸らしきものは，わずか一部。大部分が素文沙器。次に刷毛目，三島，軟質白磁である。井戸茶碗も玉子手，雨漏り堅手や，金海，御本手と同じで，白磁，素文沙器の酸化生焼けだということが良く分かった。カイラギ，ピワ色，焼締まらない胎土。手取り非常に軽い。それは作為ではなく，窯の仕業が成した失敗作で，その中の一部のサバル（鉢）に茶人が目を付け，愛顧し崇めた。それは，侘，寂に通じ，美的価値を得ることとなったのだと考えられる。

五部粘土の原土場では，靴の底に土がネチネチとくっつき離れない。粘りの強いカオリン。軟質白磁（井戸茶碗）の原料だ。赤茶色，クリーム色，白色，灰色のカオリンが玉状で産している。単味で充分ロクロが引けるカオリンで，権氏の陶房で私が作陶した原料だ。そのままでは，焼き締まらなく水漏れするが，韓国で唯一の粘土である。

十一月十二日（水）

曇りのち雨

^{ベクヨン}白蓮里窯跡調査。^{ボッキ}法基里窯跡調査。

白蓮里も井戸茶碗を焼いた窯だと言われているが、意外なことに安山岩地帯で、半風化したやわらかい安山岩あり。

慶尚南道^{ハドン}河東郡^{チンキョ}辰橋面白蓮里窯跡

（釉 薬）総掛け

（目積み）砂目積み

ほとんどの陶片は強く焼け、古唐津の陶片のように焼き締まり、緑灰釉が掛かっているが、生焼けはビワ色に近い色でカイラギあり、井戸の正体である。

慶尚南道^{ヤンサン}梁山郡^{トン}東面法基里窯跡

この窯は、伊羅保、雲鶴が出土したと言われる窯跡。ここも白磁陶片がほとんどで、白磁窯址である。その中に中性炎の陶片があり、美しい卵の斑が出ている。

十一月十二日（水）

曇りのち雨

永川の陶芸家・鄭点教氏を訪問。作品を見学。

慶尚北道永川の鄭点教氏の屋敷は、300年程前に建てられた韓屋。

陶芸家・鄭点教氏は、伊羅保の再現を試みている。そのすばらしい伊羅保茶碗の写しを拝見。登り窯も昔ながらの技法で作っており、^{トチミ}陶枕積みである。釉薬は、長石は使わず、^{スウルト}水乙土（砂）を水ヒするのみだそうだ。

鄭氏の作品茶碗は、あまく軟らかく見えるが、胎土締まり、卵の斑美しく、ここまで完成された茶碗を手にとったのは初めてだ。

十一月十三日（木）

晴れ

朝、鄭氏の案内で古窯跡を3ヶ所まわる。

慶尚北道慶州郡^{ヒョンコク}見谷面^ネ夾臺里中期白磁窯跡

初期粉青沙器窯跡（上記窯跡から100mほど先の山）

慶尚北道慶州市南沙里窯址（8月28日訪問済み）

ここの窯に来るのは2ヶ月半ぶり。一人で陶片を拾っている時に、權氏から電話がかかってきた場所で、なんだかなつかしい。

ここで鄭氏と別れる。鄭氏は私達同様、「焼き物バカ」で、とっても人柄のいい方で大変お世話になりました。またぜひお会いしたい人物です。

十一月十四日（金）

曇り

晋州博物館見学。

晋州に戻り、晋州博物館を見学。日本から見た文禄・慶長の役と、韓国から見た壬辰倭乱・丁酉再乱との認識が程遠いことが分かり、私自身の立場がどちら側にあるのか考えると、今この場所にいることと、今日まで3ヶ月間近く、無断で古窯跡を回って来たことは大変恐縮しなければならなかったことである。それにもかかわらず、この3ヶ月間、一度もこの地の人に責められることなく、それどころか、快く迎えられ、歓迎されたことに何とお礼を言って良いのかわかりません。

十一月十五日（土）

雨のち曇り

チャンス ヨンゲ 長水郡龍溪里調査。イムシル トイン 任實郡道引里調査。

全羅北道長水郡長水面龍溪里に着くと、どしゃ降りの雨。この村も窯址がある雰囲気の山がない。

（釉掛け）総釉掛け

（重ね積み）荒砂高台

中期から後期の民窯白磁窯だろう。

全羅北道任實郡^{ソンジュ}聖壽面道引里

村のハラボジ（おじいさん）に案内してもらおう。畑の中に陶片が散らばっている。灰色白磁である。三島もごくわずかにあり。

（釉掛け）総釉掛け

（重ね積み）荒砂高台

小振りの高台が特に目立ち、総釉掛けなのに、古唐津と同様、高台を持って釉薬を掛けている。不思議な釉掛け。

十一月十六日（日）

晴れ

チクネ 竹内里窯跡調査。

南原からクレまでは黄色い真砂土。クレからは赤真砂土に変わる。

ケモクに着く。とりあえず腹ごしらえと思い食堂を探すが、みんな閉まっている。

1軒だけドアが開いていた。「食事OK？」と聞くがダメだという。朝から食べずに来たため、困っていると「オッケー！オッケー！^{アンジュセヨ}すわりなさい」と言って、調理場

からキムチやノリ，汁物と御飯とあれこれ，お盆一杯に運んで来た。「アジョシ（兄ちゃん）が困った顔をするから，取りあえず私達の昼飯をどうぞ。」と言う。

ありがたくいただく。何しに来たかと聞かれたので，竹内里の陶磁窯跡を調査しに行くと言うと，「竹内里ならこの道をまっすぐ行って給油所を左に曲がった所だよ。2年前にソウルの大学が発掘調査して，その時ここに食事に来てた」と話してくれた。話せるすべての韓国語でお礼を言って食堂を出る。

今日は簡単に見つかるぞと山を登るが，陶片が1，2片のみで，あとは何も見つからない。右に行ったり，左に行ってみたり，もっと頂上の方へ登ってみるがない。一旦山を下り，畑を耕しているおじさんに尋ねると，やっぱりこの上だと言う。もう一度挑戦するが，陶片は見つからない。とうとう山を越してしまった。もう時間がない，今日中に釜山まで戻らないといけない。

最後の窯跡は，空振りに終わる。

全羅南道^{スンジュ}昇州郡^{ハンジョン}黄田面竹内里窯跡

三片のみだが

素文沙器 総釉掛け，胎土目3つあり。

白磁 総釉掛け，砂目積み5つあり。

十一月十七日（月）

晴れ

旅の終わり

8月20日，ビートルで釜山に降り立った後，私は今回の研修は李朝初期の窯址視察と決める。結果李朝陶工が自ら場所を探し選び，作陶生活した村は，どこの窯も山そびえ立ち，水美しく，創作空間としては最高の場所に位置しており，朝鮮半島の山の中また山，川を探し回り，山緑，水清く流れ，陶磁片が美しく光輝く，沙器谷村へたどりつき，400年の時間をワープし夢の故郷へ帰った気持ちでした。

朝，トラックの騒がしい音で目が覚める。やっぱり釜山は大都会なのだ。今日は韓国滞在最終日。午前中のうちに発送荷物と手荷物とに分け，11時に国際ターミナルへ，そして3ヶ月ぶりに日本に帰る。船の中はほとんどが日本人で，顔の輪郭に違和感を覚える。

韓国での研修は，予想以上の成果を挙げた，思い残すことはなし。

田舎から唐辛子やどじょう，人参などをいっぱい入れた桶を2つも3つも抱え込んでバスに乗り，町まで売りだしに行くアジュンマ（おばさん）達の元気で明るい声や，山の奥深く小さな村で，ゆったりとした時間を過ごしているハラボシ（おじいさん）達，そして旅館のアジュンマ，バスドライバーのアジョシ，そしているん

な姿，色を見せてくれた山，川，そしてたくさんのマイフレンド，大変お世話になりました。またいつか必ず来ます。それまで，^{カンキ}塞気など引かれませぬよう体に気を付けて下さい。本当にありがとうございました。

カムサハムニダ！